

平成 22 年 3 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2007～2010  
課題番号：19530790  
研究課題名（和文）教員養成カリキュラム開発のための授業力育成に関する基礎研究

研究課題名（英文） A study of teaching skills in a curriculum to be developed for student teachers.

研究代表者

高木 幸子（TAKAGI SACHIKO）  
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授  
研究者番号：70377175

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：カリキュラム構成・開発 授業力

## 1. 研究計画の概要

本研究は、模擬授業や教育実習等で児童生徒への授業を経験した学生が、教員採用後、授業の構想・実践をどのように行っているのか、また、改善しているのか等を追跡し、養成段階で押さえるべき内容を検討するための基礎資料を得ることを目的としている。

そのため、具体的には、はじめて授業を行う段階（3年次春期教育実習）から卒業後2年程度を経た勤務校での授業の具体について、継続して変容が検討できる記録をとり、授業構成や児童生徒対応に関わる意志決定について聞き取る。そして、この期間に見られる変容に注目し、データを基に教員養成カリキュラムに含むべき内容や要素を検討する。

研究1年目は、教科指導を中心として小中学校教員が行う主な職務を洗い出し、養成から採用後を通じて追跡する観点を設定する。また、3年次、4年次生で経験する模擬授業や教育実習の授業を記録するとともに、追跡対象者の勤務校に赴き、授業を観察・記録し聞き取りを行う。

研究2年目、3年目は、1年目と同様に、教育実習授業の記録とともに、追跡対象とする教員の授業を観察・記録する。そして、養成段階での経験と現職教員の場で必要とされる力の関連を検討する。

なお、4年目も、授業記録を継続するが、研究の総括として、追跡対象者の大学3年次からの授業記録を比較し、授業構想・展開、児童生徒対応の観点からその変容や教師になって新しく習得した内容や力をまとめる。

## 2. 研究の進捗状況

これまでの3年間を通じて、以下の内容について研究を進めてきた。

### (1) 授業記録の収集

全体で8名の追跡対象者について教育実習（春期、秋期）及び卒業2年後の勤務校での授業記録を行い、計24の授業データを収集した。

### (2) 分析材料・視点・分析方法の設定

分析材料には、事前に準備する学習指導案、ワークシートと、実施された授業のビデオ記録を用いる。

分析は、指導過程と配分時間の比較、教師の行動や児童生徒への対応、教師の指示・説明や応答の良否、教材の種類や活用などの観点を設定して行う。その際、データの質やレベルを評価するための3～4段階の基準の枠組みを用いる。そして、計画と実践のずれが見られた部分に注目してその要因を考察する。

用いた分析方法は、発話プロトコル分析、教授・行動分析、教材の役割分析などである。

### (3) 得られている結果と知見

#### ① 教授・学習行動

授業のビデオ記録で観察できる教授行動を4分類、学習行動を5分類して、かけられた時間の割合や授業の流れに伴う行動の切り替えを分析した結果、調理実習など児童生徒の活動が中心の授業では、教授行動・学習行動ともよく似た時間の割合を示した。この結果は、授業を効率化するために指導過程が

パターン化される傾向がありそれが要因と推察する。

また、勤務校での授業は、教授行動の切り替えが頻繁で複数の行動を同時に行っている傾向がみられた。これは、授業の展開場面での即時的な対応がより多く行えていることの表れと推察する。

#### ②教師の言葉による指導

教育実習で行われた 16 授業のうち、調理実習など活動を中心とする授業を除く 12 授業は、教科・学年や学習内容、実施時期など、全てが異なっていた。しかし、それにも関わらず教師の指示・発問・説明など言葉を用いた指導にかけられている時間の割合は全体の約半分(46%~62%)を占めていた。この結果が一般的な傾向であれば、教師の用いる言葉の内容や分かりやすさの重要性を養成段階で意識する内容として組み入れる必要がある。

#### ③ワークシート・印刷教材

3 年次春期教育実習の授業では、使用されたワークシートの多くの部分が、板書を写す、または、実験結果などをそのまま書くために用いられていた。秋期教育実習では、結果をそのまま書くだけでなく、考察を加えたり自分の意見を記入したりする記入欄が多くの授業で設定できていた。さらに、卒業後の勤務校での授業では、子どもに自分の考えを整理させたり応用問題に挑戦させたりするための記入欄を準備していた。

また、印刷教材に注目すると、春期教育実習の授業では時間短縮や効率を上げること、秋期教育実習では、授業の重点や要点を示すこと、勤務校では学習目標の達成を支援することのために多く用いられていることが分かった。これらの教材は、授業者自身を助けるためのものから、児童生徒の学習を支援するものに移行する傾向がみられた。

教材のありようは多様であり、全ての教材を明確に区別して分類することは難しい。しかし、子どもに対して果たされる役割や子どもに求める思考の深さの視点から分類の枠組みを設定することで、授業場面で用いられている教材の一部については教師としての成長の視点からとらえることが可能であると推察する。

授業場面で観察可能な材料をもとに、教師としての成長を分類できる枠組みを設定することで、授業実践の事実を対象に、自分の授業の課題や傾向を客体化して理解することが可能であることを知見として得ている。とらえる枠組みや質の良否を判断する基準などについては、今後も繰り返し見直しを行う必要があるが、本研究の成果を養成段階のカリキュラムへ適用することは可能であると考えている。

### 3. 現在までの達成度

「②おおむね順調に進展している」  
理由：授業追跡者数は、計画段階で予定していた 13 名にはいたらなかったが、小中学校教員として採用された卒業生の全員を含む 8 名について勤務校での授業を記録することができた。それらのデータからは、教育実習時の授業に共通する課題や教師としての成長の表れと推察できる傾向を見いだせている。

### 4. 今後の研究の推進方策

今後は以下の 3 つの内容を進め、本研究のまとめを行う予定である。

- ①授業実践場面において教師の成長がとらえられる枠組みや分類基準の見直しとともにデータ分析を進め考察を深める。
- ②外部評価で高い授業力を認められている教員の授業を参考事例として取り上げ、養成段階の授業と同様の方法で分析・比較する。得られた結果を基に教師としての成長の方向性を確かめる。
- ③勤務校での状況や職場での課題意識などについて得ている調査結果の回答を上述の結果と照合し、養成段階に求める要件の整理を行う。

### 5. 代表的な研究成果

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- 1 高木幸子, 教材の役割変容からとらえる授業実践力の向上一教育実習生から教師への成長一, 教材学研究第 21 巻, 2010, (掲載頁未定), (査読有)
- 2 高木幸子, 養成段階において家庭科授業作りを支援する指導用資料の検討-「家庭科授業が分かる・できる・見える」一, 新潟大学教育学部研究紀要第 2 巻第 2 号 (人文・社会科学編), 2010, 227-240 (査読無)
- 3 高木幸子, 授業実践力の向上についての分析: 教育実習生から教師への成長, 教材学研究第 20 巻, 2009, 39-50, (査読有)
- 4 高木幸子, 授業構造に着目した家庭科教員養成プログラムの開発, 家庭科教育学会誌第 51 巻 4 号, 2009, 291-301 (査読有)

〔学会発表〕(計 3 件)

- 1 高木幸子, 教育実習生の家庭科授業における授業実践力についての分析, 日本家庭科教育学会, 2009 年 6 月 28 日, 北海道教育大学